青表紙句集

中村俊定文庫
文庫 18
493

わが世尊の十大弟子と言ふことなき君達の
おもしろかるべし智恵第一孔何神通第一
孔何とよやうふるを孔一ツく消し消ふる
徳のおもしろかるべき孔子乃十哲とてかしこき
人く孔以ものもうかるべし徳行を後言語を
雑と已しかるべしかるに道の有りかたを芭蕉
翁乃孔雅孔門人まを乎角をを孔句孔庵
やうのよ丈をを静よ孔波を孔く土芳おに
新六をもをしき孔おり正秀を奇よ丈孝を
おもけりをを末孔孔おりしめを已ふ好を

句仏の一生しまりてかゝる事乃うるしに習ひ
得るなり　これ孔舊翁一人のあるより
出るうくを孔句仏のかゝる孔や世尊の
十大弟子孔子孔十哲乃中にひきくされむ
を孔門人をうる中にも関東ハ其角嵐雪
といひ西ハ去来丈角ハ嵐雪を孔雅を孔雅角の
業としまる名利孔境ハ遠へさを孔流れを
汲む業し多くて其角ハ五元集嵐雪ハ白
峰集をいへる家の集ありて世ハつゝふさる孔

去来丈角を蕉翁孔直接孔むをあるを
孔雅の名利を沈くいるひて第一拙毒微
笑孔ゝろをよく傳くて一家の傳書を著さを
一人孔門人孔をめきれをやして孔農白を畫
集へま人も孔しこ孔寵こゝ為さを蕉翁乃
孔雅の兼題ゝへ孔弟ゝこゝろ出こ人の孔
雅を去るひ字嘯孔嘯孔雅の花ハ孔ひて
を然ハちうき嵐山を吐して彦柿舎ハ
むうをゝゝ栗津の浦孔秋の月ゝ孔れて
秋のもるや京孔菴と称て昌孔先のまれ

ふかとちらくうしこよりまし家ゑ里ひ出こそ
書ひつ老ゑる農自を久しく元叢孔底に
かくしの道しをこ孔古詩嵯峨城の重厚繁伊
孔魯江の二法陽寫んことを好きのちに
こひすと色めるゑ孔しむうゑ生や窓の
あへ出していくてゑ古人孔んゑ皆くゑちゑ孔

明和い年卯の春二月東山嵯峨孔里

五弗菴にて蝶夢記

去来姓を向井名を元昇郎号蓼焉と肥
前也藩孔人ゑり彼地の聖也乗酒乃
氏族ゑして世く儒を業と生博く書をよく
ち文唐学をきて色詩歌を能ふゆく洗
練ゑしゑ特猪を制生都ゑ遊りゑ何
ゑし孔殿下ゑ仕へまる宦徒の時ゑて芭
蕉翁ゑ陪ひて俳諧の九雅を学ふ鴨川
孔東聖護院村ゑ住りゆき嵯峨孔小倉山の
麓ゑ別荘をいとゑて行通ふゑる新のころ
庭ゑ柿の高しとゑてゑを孔居を嵯峨舎と

名つく菊亭内府ゟ被之字を賜
寛永元年の秋九月十日没を墓を東
山霊屋あり今此高柿舎を改和乃
こゝろ重原再興して今存せり

去来幾句集

春

元日や家よ清り北太刀常人
元日や土つゝふし高彩も安生
鶯形てを逢しふても花の寺
商人の京言ゆさゝ伊勢状長
遠菜よりけてかさ高や老の油
菜果やたゝよりて松乃陰

京都帝国大学図書之印
中村俊定文庫

月雪ゆきめぐる　さゝし　門の松
獨り　寂もたまはる人初子ゆゑ日
やう　葉つゝ　あり　ゆゑらさん　俤
　　嘆嘆　まてある　曙ふ
春や　祝ふ　冊波の　寂も　傳ふて
夢ゆ　時や　俳ひろふ　宜まも
うゝひも乃　音つゝ　ちりぬ　二三日
鶯や　内の　も　時も　地うゝ　事ふ
黄金　ゆ　ちゝ　くゝ　そこに　樂　寿う　面
うゝひすの　鳥　ちり　音や　谷の　夜

夢や　雀　ちゝ　り　枝うつ　梁
黄鶯　ゆ　ゆ　時　ひうゝ　鳥の　音
　　風　却う　春　ゆ　音　ゆ　童　ゆ　ん　と　毎　ゆ
　　然て　出ゆる　に
うゝひす　う　人　の　生　物　ゆ　う　梅　う　時
夜　ゆ　て　い　多　ゆ　さく　梅　ゆ　ゆ　ひ　ん　ゆ
　　上　前　の　山　春　ゆ　し　く　ゆ　ん　子
　　俄　し　俤　ゆ　て
梅　う　多　や　山　路　ゆ　入　る　大　の　ゆ
高　海　や　海　ゆ　夢　て　う　ゆ　ゆ　花

五六おもりて考ふ〳〵 柳の黄
應じて人をまこのやうやうまき氣
事務の事〳〵しきる遊ふ 板戸の系
姑乃ちまこのる人を 柳の紐
多能しさよ 園のつゆくの臘 月
鉄まこまま事多 夜ちれと紙ちり
法ちり孤文の返した
紙自一ちつて ちれう那
井魯町 前ちへ神ちまる
ちとちまりり中ま高ちり 機 月

嗅ましに まてきこう事や猫の悪
うき友よ の中れ子猫 望ちう更
件京ヤこ 更れこむ猫のこひ
いくをへりう 奇野岸 鮭 う市
田 時ヤ 紅を背負 ちく 鮭
一味を 考〳〵 時ヤむ 雄 う那
流つやもひしゆと 雄 のかろ氣
鮭乃 れ〳〵 うう人よし 雛
帰るとて あつ中る 雁よ 海のそ
遊ふも 行とも 考ち 葱 う鮭

山雀の言ふまねも別なれ
拍子やとて下座より真さきに雛
より帆の法師さまなる御平氏
うこくとて尺八を畑うり男の面
陽炎やなまるつく庚申奪
神鳴や一もの面のさんうるま
寺丸に明出ふり水形蛙
合丸遊作
踏青や夏も名残も堅逸の俤
丈高き哭き

九十年孔笑を象の眼より化し
そ形恨を百年乃少を生を惜
さても形名残おしく也一句を
多向て来しうる行を俤を語り
俤のく
寺市名よく夢やとも孔生別
花を中つ日暮よりを生なる乳
西行の詞をうりて頼政形詠を
雛を鉢きも人を形ることを乳
使を寺馬を鄭於少

佛舟も好ことそよれ初さめ
花ぞやや白き所をつき今せ
知る人よあはしくと花尺小
何ゆゑ花人乃長刀
咲花のうき世此人や神ぞ
ゆゑ聖山きちる方よ忘めり
小袖かな屋ちりうしや窓の花
一時をいかに山こゝろ花さくの里
花見もしもせぬ里の犬此者
湖上此花

花よ今眼入り志賀此浦
主拾の磯り多さよ花の中
田上此尼へ花尺ゑ中ゆ入て
海を見る目つきも出き忘此雲
山深く分入りて
木の宮此天狗り今を花の友
南都の般若寺にて
数々ゆ花や般若乃奇此百
数錢も角迄散ちり森の花
花更と散ちきや鎌の岡此山

移さるゝ芳野ふうしや夕櫻
つむしろちるや日〻の赤樣
ゑ一さいゆきぬうるさや鄙の山

冬居

山畑ぬしとのゆゝを机うち
霞の根やあけてゆり出す菜つゝ
百姓も麦うりつく茶摘哉

翁ぬ分中り殆ひしぬる年の
寺義仲寺へ詣る

石塔もさやかつくや寺ぬ雨
三月ゝ名ゝ書のも名殺うれ
糸屋ぬ形寺殉のんを
神風ぬ伝生も如うし門の伴

夏

鄭ゝ寺ゝやゆ雷雇ゝ十文字
うゝ出ゝ山ゝ人ゝ寺ゝ る規
先祖ゝ形尺合寺やかゝ寺
仏寺ゝ代ゝ友廢や時鳥

吉野なる逢坂山のかなたにかくれ
横雲の間や山出し月 鄭子
俤ゆかしきまつの一本の梢に春
うらむらさきもやゝ交る刀や 岡雪
明るの空 第ひとけなきに
西山へ寺ゆかしく
新芝に 雪や内野の 子規
能登路なる あるじうと家所あり
和哥をよみて
あち孔身もあるしうる中 鄭子

伊勢にて

和孔花も海のかさりや 鈴鹿山
うの花孔 絶日参うえ 寺の門
巡礼のころ
和乃花に 笠掛ゝ 和賀山
光りあり二ツ孔 山乃 歳り 雷
色しの 他とちらり 麦孔 おと
つゝ 雨ふる 孔ゝや 麦 畑
郭公の 巣孔 ゝ ゝ ゝ
毎年孔 一 濱 留 ゝ 孔 花

鶯啼路ふる雪の人もなき梅の花
元禄七年九月十日
京より行れるを餞し事
酔彩小蓼こぼるる白らくの事
竹のあや扇傳ふ悪太郎
義士はるのは春をいそぐて
筆は樹より生るし方は作
瀟の水やさきりなる五月雨
世ましに三月物も五月氣
大和紀伊の境をてちし坂まて

世来の順禅をそ発まめ
それを粉呂つ〻ふる事はたしよ 書付ける
つゝもてなし坂や五月雨
ものとり峠まて
五月雨ふる池もや紀伊は八月目
曲水るにいさもれて勢田の蛍
見よ中の流ふる人への狂流れに
つきてちぬと疑れて形舟を
さしたし事
おしゐ火や 黒津は楢見う峠

螢火や吹とされて鳴沢の闇

蛛の子の分散する家々

夕陽上る山しゝ清水かゝる氣

水札等や亀沼しゝる岩根上

鶏もとらく時々水鶏なく

石垣の苔紙幣入るや閑の鈴

尺物の先るとゝ氣まぬ物水

橋寒して多々き多根敷恵氣

木津へ出て

山里の敷も蛍半ゝ吟ひゝ

其角北斗乃悼

敷恵ゝゝて多たく梅の香

書策を敷恵ゝゝて

谷汲寺にて

順禮も志や猶ゝ魏北飯

すしはや須磨根上乃さゝゝへ

立寄ゝ人ゝきれて須ゝ素

宗しさよ多立ゝ入口敷

町もしゝ氣ゝ水ゝ多ゝゝ

文ゝ敷と 清ゝゝ須磨北

猫沢の中者ものるまくこの丸
紀伊の藤代浜通り名所
三郎重家所来今よりと字ども
めれ丸景の作りしに門築地押廻
個ら馬こうき立てる矢北根立
いくし紀表七ちりまさ遊ないまへ北
子掛松て古木今も
藤しの浦やひとき門よ立まこ
浦東生ものもて美先ものを来藤の
まくしこも地山ようこ念仏ら

少まくこ花多起しを帰りら
まくくに森丸流しまの紀
葬乃こ家ようる暑ら那
石も布も船に老多暑ら
夏浦の田越坂ら人見北松まま
てるあつくはや人足乃松北丸
伝うへよ人足の松の移北
同し國まて
夏うけて美素ここ暑ら丸
美ら丸こ伊出て氏の暑の素

書まゐりや義のひうへ北尾の嶺
久しれぬ　元さいひ孫重北こ
伏見の舟中より都の方をなを
分立乃雲さうら色第又の雲
六玉川北記事
六玉川言葉〻　永き清水のや
鶯着て　疲さめさ人土用　于
水を身　北井のあ入し竹は將
北尾市乃筑紫より来るよ
むう〻　虫へ　一ッ　畑北　姉り　荒子

夕影や　名を高しる　花北形
酒屋う　鮭皮よ　屋を移せし　河
門賣も　寄自由より　裏内うか

秋

鶯なふ　てや　初秋北　日義〻　乱
うち　巻〻　弱のうら　やち　北河
滝巻〻　寄くて　酒のむ　巻むう
筑前の　黒崎　まで　明るき　浅遊り　の

角くもの沖より出て雨を北踊し
佳るとうるを吟ず
七夕をまけてやあいう舟踊
思いうを出逸して漁父北書始の
るこふふを七月七日のるまを佳りる
星時砂明亭まて
うちつゆよ星まり彩や浦北台
魯甸ゝ許まる
山かや屠乃まは星むう
意物の奥まつうしや新の顔

書よおゝ乱る人北許まて
森道多乃うくやうき意まる
多踊とも時小帰りるに
尺ゝ人も孫子とりて意多
踊子よ望を知乃高ぬゝの人
新彩や秋を庫北移家宿
屠踊北星を教魚のさうゝ
初寓や猪の以芝北起上
寓屠と風こそゆき木陰茶
悼風囲

源夕ようらふり孔雀袖の露

嵐蘭追悼

和賀孔剣うめりり芸孔露

遊女常盤あきのうるをうるをて

相し逢を人よ伝る

露ふり世の為孔身更る

芭蕉翁孔奥乃細道を辞して

そ孔書写の奥ゑ書付侍

ぬれつゝつ旅やつりて袖孔露

稲書のうきやせて行間夜ゑ

出崎丸山ゑて

以ちつ乃ゝ孔傾城ゑうり孔

都ゑ孔伝ゑ

淺芽ゑやゑ

ゑ船おゑゑ人ゑゑむる山孔

田上ゑて

山宗ゑて魚崎ふ上ゑ早稲のめと

うゑ稼ゑおゑと抱つく西風ゑ孔

風稼ゑ馬ゑ飛ゑ孔花ゑき

ひゝとゑ山ゑて和七ゑ別ゑとて

石うるもすましる嵐へし紅葉先
岩端や雲もひとり月に寂
青うり唖に花かハゆき月見の面
名月や孫うすき桑のうら
名月や海も松もそ山も又
月見せん伏見の城に珍郭
名月や むつの北極照さる
紅葉寺のうるる寺もすせて月見の乱
思い月み照こむ橋乃月見うる赤
雑くも向うん月に入れ

猫に慶よゆく方や明に月
猪嗅かを作りて打明しよ住
息仕ちれを
月に こよひ我里人乃業うん
世俗ふ ふ ふ ふ日ふ北
長崎より京に帰りて
鴨川や月見の家ゆ川ぞう
七時赤行亭
浦人を捕せて海うる月ぞう
長崎より四上ゆ橋原うつ名

名月やしさの方にせる格こゝろ

園木はなすて小姓はやさ[illegible]

こゝふを簡字

月の夢よ裾を濡さよゝゝはな秋

中秋の要物を送義して

うゝ海夜はな　月と尽よりゝ地遠遠

出時諏訪の社すて前書ゝ

名とさを京てうゝふも諏訪の月

十六夜や出しうゝゝ重はな色

弱葉の木曽や出ゝんこゝの月

海山を京へて後はな月尺ゝの面

宰府宮納

第秋はな白毛も神乃光ゝ乱

一戸や京も中ゝゝ弱むうへ

京掛の城をさやきゝゝ少

始ゝ嫁ゝよゝ紀　姑ゝ姉

あゝ乳やゝゝゝの弓ゝ孫ゝん

秋風ゝ耳の垢ゝゝゝし　中

吉備津宮奉納

秋ゝのせや鬼ゝひしゝく吉備の山

[illegible]所のやい森よりうく鹿北角
小男鹿や岩を踏たる雲の[illegible]
峰鹿を推の木枝[illegible]
枝おしや[illegible]吹[illegible]茨のこへ
たく山やを寄てく鹿北寄
伊都岐急すて
三川瀬乃岩かな立や鹿の聲
浦路や通しも矣[illegible]
鹿おし[illegible]の上は渡り[illegible]
出身北[illegible]築紫より上る

道おあ鹿北鹿峰を通り[illegible]
人くとへりたもたつまいいそき
せれてのたりる晩一枝北なる
書[illegible]免侍る
[illegible]聖と宋[illegible]いそうしやう鳥
長崎[illegible]指鹿のころ
[illegible]さ[illegible]も今[illegible]うり森や渡り[illegible]
雁[illegible]の等[illegible]時[illegible]
筑前北[illegible]
福岡や[illegible]賀[illegible]

同月晦日

家毛ふてすゝ海藻女や鮫つり

先行をゆく北浦ヨ訪ふ

八月や海のさいきを山うつる

田家

聞すんとふゝ栗山ヨ乃勝刀

有磯海集撰ぜらるゝ時入白

ゝも書かつゝ色紙せるに添て

後ゝ

警孤集や雲ゝヨ如ゝる有磯海

松茸や人よりゝゝ泉孔先

走て神職ふもゝゝる人を賞て

花も実も愛稲ヨ美し神の秋

経俊律ゝて

芦孔稚ヨ著ゝ川ゝゝや家の猪

墨如意ゝて先師孔ゝゝ中

出ゝ序ふ

秋ゝ中川日ヨさつ菊の蒼ゝ乳

栗実ゝ子ゝ孔根のかさりや山畑

流前持ゝて

葉ばかりもれて梢とや濱庇

自題彦根柿舍

柿ぬしや指さちこの実おもし山

唐柿舍感偶

柿賞や人れとぬいらる紫素麦

芽立より二葉よ志多る柿の実く

丈高ゆされしもいつ此ひろ有

ひ人彼奇柿舍むらちこちらし

恋うて蔓る柿此面の条も根岡の孤

屯時よりて点考み達と京此ろ

ちゝ面つるられて

息戈此世ま人間まん嗟咲の柿

木此ゆゝふ面生ゆけ木孫と

園坊よて

法山乃茅麦白ふへや孫と蛤く

唐人此此とて有てそ人此

ふれるう

嗽へゝゝゆり世新ゝう此

嵐此説

面枝持ゝへつるう栗此嵐も

續甲陽軍鑑

春ゝ蕚まゝ花傳農の義士を中間山
也き夜も拾ふ事なく落れ乃
聖護院すて
撰花木の色もさめる中秋花室
うき人をまさに說うん春の夜の

冬

春花ゆもかいつくろいぬ初しら花

うもゝゆ花
板ゆとゝ
いそうし
一対あし
こうし花
走ゝゝ中
重ゝりも
山雀の里
響物乃上
屋対さ

花爲帽子の上や初対面
ゝ意を意き初しら花
や神花対面乃告帰臣帰
しら花て的し辻行灯
地を意さぬしら花番
面花小袖を吹うへし
先ゝ春ゝ対面う敬
うゆさ春ゝ花小
ちよちよ小しら花
村花対面う告

翁に病ふを聞て伏見より
夜舟さしくだす
舟よ舟と音物に問や冬籠
翁の病中
白鷺のあまりさむしかれもこすり
蚤虱も一つ人前に火燵の番
生花半や火燵除て月に氣
翁の病中彩猪に
未こうし乃京尺直もに鶴のこへ
傷を師匠に事

ゆきくれぬ宿も十夜に泊るか
去年の許より芭蕉翁乃ちらく
ちらつり雪あるさ彩色庵よ
偶居して山地さへまきれすして
彩雪や茶湯の後に薬鍋と
つるうへし
雪や人参つ人て蓑まいて
翁を田忌に義仲まるる
蓑うつを庵を袖に乞れ
りうて蓑を米りり軽き鍋

右雪情を案りて

船馬みやこ江ちかゝ七神寺内

於ゆくすゑ

初雪や四五里をさて比ら北嶽

應くといへと先くくや雪の門

せ免よきて雪北つるや小松北嶽

雪北山かいつく孫もちのうゝ

丸雪ゆるれぬ雪の屋さうゝ

御やる奥のところや比ら乃雪

格人乃ゆき通ゆき雪北於

孫北中に居て見る雪の山路ら雪

雪室や鬼も孫を出さへう

悼法化君

そ北姑や京ゆ花蝶る此逢の雪

嘆簾や雪ゆとさき孫義可

軍書を讀て

雪伸れと事盤信前北家樓

ひつゝけて切や雪吹の雲峰北産

於於ゆきゆく上ゆくゝ乃少

老衰者と指やきれ人玉おれ

訪僧法師

馬道や苔をとりて雲北の山

山畑や言をのこして行くの春

雲海の眉北毛長し夜の霧

和七奪

雲自や日やせる去りく行くすり

雲南へるへし

筋さうと問るゝ京や冬の霧

賀砂俊山樵集

わすしや 剣をぬるふとちく山

夕照よひゝつく孫北うれ葉ゞ

冬うれの北向歌人麦を麦

賽銭を高して拝ふ高原北

市ゐ見て林しき新や神送り

荒磯や もしほ引くあゆ

鴨きくや 方矢を捨て十五夜

尾形北 ふとなきを海氣れ

そ北古き霜夕見を 鉢やき

物こゝろ門引を生鉢さゝ北

答書也 生物てり又や人鉢設

十銭を投じて茶の新を買ふ
務人の孤きを北に秋水く寒
猪の火よ新る冬さま俺原の
　　懐傳まる
宝き夜中男つくり侍 山北上
　　堀川を通りて
有明よふり向うき宝さの雷
火ともけ色 皆戸うき寒し竈の前
　　李下う書北方中れるに
春しまにやうへ次ゆく北下し

笠人よおひ〳〵いも人親北鍋
宝邪集や火を焚く南ちよ　あわうん
志楽北ゝと寒し帰 佛名
　　廣澤
池北面 その形る地書岩 山
　　保凡ふ乃掛集を祝ひ夢今
　　年〳〵せんとおりふに書むしろ
　　〳〵〳〵北 墓〳〵うて 蟻出る
　　物ちうと人のかれをうるを
　　寒ちるへと決し待って

奈麿よ一枝折やすむしろ

丸て行年のやゝ寒や伊勢慈地

行年小夏枝折や風の形

うき屋敷一寸ほどうとしの智

やしきと丸半枝尾ちと枝毛ちり小

神鳴もさいくや年の市枝吉

世時枝浦ゟ移居して

奈良乃ゝ夏て川や夏枝下

とし枝夜の鍋や鍋やこの膳

年の歌や人ゟ夏枝十七ち